

【心とは裏腹な身体～その1～】

行動障がい呈する方々を表現するのに、「一番困っているのは実は行動障がいを呈している本人である」という言葉があります。もちろん、それは、行動障がいを呈しているわけですから、「一番困っているのは、その対応に当たらなくてはならない家族や支援者である」という常識的な答えに対するアンチテーゼとして存在しているのですが、例えば、何回も説明される聴覚的情報提供（いわゆる言葉）だけでは先の見通しを持つことができず、結果として暴れてしまっているという場合には、＜暴れて回りを困らせている人＞という前に、＜見通しが持たなくて困っている人＞が浮かび上がり、確かに一番困っている人は当人ということになります。

また、心情的には「実は物を壊したくないと思っているのに壊してしまう」とか「人をケガさせたくないと思っているのに殴ってしまう」というような「自分の思い通りに動かない身体」を想定すれば、心とは反対に動く身体を持っているわけで、確かに一番困っているのは当人でしょう。

以前、こんなことがありました。

ホームセンターで、歩き回っているYさんに会いました。一人だけで来ているはずがないので「お母さんはいっしょ？」と尋ねると彼は店内に響き渡るほどの大声で「だめ～」「あとで～」「うるさい～」と叫び始めます。しかし、彼は私の方法をチラチラ振り返りながら歩き始め、そのまま着いて行けば、そこにお母さんはちゃんとして、彼は口では「だめ～」と言いながら、母のところまで私を案内していたのです。これは「しゃべっていること」と「実際の行動」との不一致を私たちに教えてくれます。

また、昔々の話になりますがこんなこともありました。

事業所の行事の終了の後、Jさんはお母さんの背中を「帰れ！」かというようにグイグイ押します。多くの家族の方々が明日も続く行事のために事業所内に宿泊になっています。Jさんは母親思いのやさしい方で、お母さんのことが嫌いであるはずないので、背中を押す姿はとても不可解でした。

そこで＜家＞と＜事業所＞の写真カード

を持参して、混乱の中、「お母さんにはどうしてもらいたいのか？」と聞けば、＜事業所＞のカードを選択しながら、お母さんの背中を押し続けるのです。これは「見えない形として存在する心、あるいは感情」と「見える形として出現する行動」との不一致を私たちに確認させます。

この不一致さは、確かに本人を困らせ、「一番困っている人」としての行動障がい者の姿を浮かび上がらせます。

人は「話す言葉」や「見える行動」で相手の考えていること、感じていることを判断の根拠としているので、多くの方々は「伝わらない思い」を抱えながら日々を過ごしていくことになるのでしょうか。

「だめ～」「こら～」と言いながら、母親のところへ案内していくYさんの本当の気持ち、「帰って欲しくない」と思っているのに「母の背中をグイグイ押してしまう」さんの本当の気持ちは、言葉や行動の陰に隠れて伝わらないまま、彼らの心の中に沈殿していくのでしょうか。

私たち支援者は「心と裏腹に動く身体」の存在を強く知っていなければなりません。

アルコール依存の方は、本当に飲みたくて飲んでいるのか？飲むのを止めたいと思っている心とは裏腹に、身体は目の前に置かれたアルコールを気がついたら飲んでしまっていたということなのではないのか？

Kさんは、出勤した夜勤者Aさんに向かって「かえれ～」と叫びます。そして「夜勤者はBさんです～」と出勤した職員とは別の職員の名前を叫びます。常識的な理解方法では、KさんはA職員さんのことは嫌いでB職員さんのことが好きです、だと思いますが、私たちの支援は、こうなります。

「Kさん、Aさんのこと大好きなんだよね。Aさん、いつでもKさんのこと一所懸命考えて応援してくれているものね。でも大好きって伝えようとする、嫌われたらどうしようという気持ちが、そしてどうせ嫌われる決まっているという気持ちが同時に湧き上がってきて、反対のことを言ってしまうんだよね。Kさんの口、困ったものだね」「自信を持って大好きって伝えるのはどうしたらいいかなあ？いっしょに考えよう」こうして支援が動き始めます。

【つづく】